

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 27 日現在

機関番号：32630

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520929

研究課題名(和文) 秦漢墓の成立からみた秦漢帝国の支配体制の研究

研究課題名(英文) A study on the governance of Qin and Western Han dynasty

研究代表者

小澤 正人(OZAWA, Masahito)

成城大学・文芸学部・教授

研究者番号：00257205

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円、(間接経費) 600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の結果、以下のような秦から前漢前期にかけての統治の実態が明らかになった。(1) 秦の占領地では副葬飲食器の中心となっていた礼器系セットが姿を消す。この変化は、礼器を威信材としていた各国の支配層が、秦の占領により消滅した結果と考えられる。ただし秦墓の副葬飲食器には、秦の中心であった西安地区のものが持ち込まれる地域と、地域色が強い日用器が副葬される地域があり、秦の支配に地域的な強弱があったことが分かる。(2) 前漢前期の墓制は秦のものが継承されるが、上記のような地域色が徐々に解消される方向性が認められる。この変化は漢の支配が緩やかにではあるが、着実に浸透していった結果であると考えられる。

研究成果の概要(英文)：This study clarified the realities of governance, as stated below, from the Qin through the period prior to the Western Han. (1) The formal goods disappeared in Qin-occupied territories. It is believed that this change resulted from the disappearance of the ruling class (who used the high-status formal goods) caused by the Qin occupation. However, through the tableware burial goods of the Qin, we can understand that the influence of Qin varied in each region during their rule; areas under strong influence would import goods that were brought from the Xian district (where the Qin were concentrated), where as areas with less influence would utilize everyday goods with strong regional characteristics. (2) The period prior to the Western Han Dynasty inherited its burial laws from the Qin, although we can see the gradual elimination of the regional influence described above. It is believed that this change was perhaps the result of Han control and that it permeated the region steadily.

研究分野：中国考古学

科研費の分科・細目：史学・考古学

キーワード：中国古代 墓葬 秦漢帝国

### 1. 研究開始当初の背景

中国古代史研究は、主に文献資料を基に行われており、これまで一定の成果を上げてきた。特に近年木簡・竹簡などの出土文字資料が増加したことで、それまでの文献の欠如が補われるようになり、より詳細な検討が行われている。しかし依然として資料の限界が存在しており、地域レベルでの秦漢帝国成立による統合の実態は明らかになっていないと言いき難い。

### 2. 研究の目的

秦漢帝国の成立により、中国には皇帝を頂点とする中央集権体制が出現した。これに先行する春秋戦国時代は分裂の時代であり、殊にその後半である戦国時代には7つの大国が分立しており、各国の領域は政治的なまとまりであったとともに、国ごとに異なった貨幣や文字が使われていたことに象徴されるように社会的・文化的な領域ともなっていた。秦漢帝国の成立によりこのような分裂は終わり、政治・文化・社会の統合が果たされたのである。

この秦漢帝国による地域統合へ向けた中央の政策は、『史記』などの伝世文献や、近年発見が相次いでいる木簡・竹簡などの出土資料に含まれる法律文書等から伺うことができる。しかしその政策が実行される各地域において、統合がどのように進んだかは、その実情を記した文献資料が残っていないため、ほとんど解明されていないのが実情である。

この問題を検討するために注目したいのが墓葬資料である。

早くに町田章が指摘したように、中国古代において墓葬は単なる死者を埋葬する場としてではなく、被葬者の生前における社会的な身分を反映したものとなっていた。つまり墓葬は文化・習俗といった文化史的なあり方だけではなく、社会秩序をも反映したものとなっていたのである。

興味深いことに、秦漢帝国が成立は墓葬にも影響を与えている。隔絶した規模を持つ皇帝陵の成立はその一つであるが、同時に、戦国時代の墓葬に認められた強い地域性が弱まり、地域を越えた墓葬の画一性が高まっているのである。さらに興味深いのは、この秦漢墓に見られる画一性は、大型墓や中小墓といった墓葬の規模に関わらず見られるのであり、同時に秦漢帝国の支配地域全体にわたっている点である。このような広範囲かつ幅広い階層で墓葬の画一性が高まること背景には、上記の社会秩序を反映するという墓葬の性格を考慮するならば、秦漢帝国による地域統合の進展を想定するのが妥当である。逆に言えば、戦国墓から秦漢墓への変化を検討することで、秦漢帝国による地域統合の実態を明らかにすることができる、ということになる。

本研究の目的は中国における秦漢墓の成

立過程を通して、秦漢帝国の地域統合の実態を明らかにすることである。

### 3. 研究の方法

本研究は以下の手順で行われる。

#### (1) 地域における墓葬の検討

##### 墓葬の特質と変化の解明

各地の編年に基づき、時期ごとの墓葬の特徴を明らかにし、さらにその変化のありかたについて考察を行う。具体的な検討方法は以下の通りである。

##### 1) 墓葬構造の検討

墓葬の構造については主に以下の点に注目する

##### (a) 墓坑構造

竪穴墓・横穴墓、洞室墓など。

##### (b) 葬具

木槨墓・磚室墓・石室墓など。

##### 2) 副葬品の検討

まず副葬品をその機能などから(a)飲食器(青銅礼器を含む)、(b)楽器、(c)武器、(d)装飾品、(e)車馬具、(f)工具、(g)俑、(h)銭貨、(i)身の回りの品、(j)その他、に分類し、それぞれの分類内での、器種の分類と時期的な変遷、さらに組み合わせなどを明らかにする。その上で機能分類ごとの時期別の特徴と変遷を明らかにする。

##### 各時期の墓葬の特徴とその変遷の検討

上記の成果を基に、両地区の各時期の墓葬の特徴とその変遷を明らかにする。

#### (2) 各地の墓葬の比較による秦漢帝国による統合過程の検討

各地域における墓葬の特徴とその変遷を比較検討して、中国全体における墓葬の特徴とその変遷、さらに地域ごとの特徴を明らかにする。

の成果を基に、秦漢帝国による地域統合の実態を明らかにする。

### 4. 研究成果

#### (1) 戦国時代中期から前漢時代中期にかけての小型墓の変遷

本研究で対象としたのは小型墓で、特に変化が顕著な墓葬構造、副葬飲食器及び俑に注目した。

##### 西安地区

戦国中期の墓葬は木槨墓である。副葬飲食器には礼器系と日用陶器系があり、礼器系では煮沸器の鼎、供膳器の簋、貯蔵器の壺、日用陶器系では煮沸器の高・釜、供膳器では盆・盂、貯蔵器では広口壺といった組み合わせであった。後期には墓葬は洞室墓に変化し、副葬品のうち礼器系では煮沸器は鼎で変化しないが、供膳器は盒、貯蔵器は蒜頭壺・鈇・壺へと変化している。日用陶器系では釜・盆・罐・甗型壺といった組み合わせとなっている。統一秦時期では墓形、副葬飲食器は同

じであるが、新たに明器の倉(低円形建物型)が副葬されるようになる。前漢前期も墓形は洞室墓であるが、墓室幅が細くなる。副葬飲食器では礼器系と日用陶器の混在が一般化し、明確に区分できなくなる。飲食器の基本は鼎・盒・釜といった組み合わせになり、明器では倉・竈が副葬されている。倉は方形建物型になる。前漢中期になると墓形は洞室墓であるが、副葬品食器は前期までの鼎・盒・釜が継続するとともに、貯蔵器に漢式壺と奩が加わる。明器は倉・竈で同じだが、倉は円筒建物型になっている。

#### 山西南部地区

戦国中期の墓葬は木槨墓で、副葬飲食器は煮沸器の鼎、供膳器の豆、貯蔵器の壺といった組み合わせであった。戦国後期には墓葬は洞室墓へと移行し、副葬品は日常陶器に変化する。前漢前期も墓葬は洞室墓であるが、副葬飲食器は鼎・盒・壺・繭型壺といった組み合わせになっている。前漢中期の墓葬は洞室墓だが、墓室は細くなっている。副葬飲食器は繭型壺が副葬されなくなり、漢式壺が副葬されるようになる。

#### 洛陽地区

戦国時代中期には墓葬は木槨墓で、副葬飲食器は煮沸器の鼎、供膳器の豆、酒器の壺といった組み合わせであった。後期から秦代には洞室墓へと移行し、副葬品は煮沸器の鼎、供膳器の盒と豆、貯蔵器の壺・釜になった。前漢前期も洞室墓で、鼎・盒・壺・釜が副葬されている。中期では洞室墓の中に空心磚で墓室をつくるものが現れる。さらに副葬飲食器のうち壺は漢式壺に変化する。

#### 襄樊地区

戦国中期の墓葬は木槨墓で、煮沸器の鼎、供膳器の盒、貯蔵器の壺、盥器の匜・盤で構成される礼器系セットと煮沸器の鼎、供膳器の盆、貯蔵器の長頸壺で構成される日常器セットがある。戦国後期では墓葬は木槨墓で変化しない。副葬飲食器では煮沸器は鼎、供膳器は盒、貯蔵器は壺で構成される礼器系セットと煮沸器の釜、供膳器の盃、貯蔵器の罐で構成される日用器系セットとなるが、前者を副葬した墓葬が圧倒的に多い。礼器系セットのうち青銅器を模倣した器種には楚系と秦系の2つの系譜がある。このような礼器系セットを中心とすること、青銅器やその模倣器には楚系と秦系があるといった様相は次の秦代にも引き継がれており、基本的には大きな変化は認められない。

前漢前期前半でも礼器系セットを基本とすること、青銅器には楚系と秦系が混在するという基本的なあり方に変化は無い。ただし礼器系セットの基本器種であった壺が副葬されなくなり、代わりに釜が副葬されるようになり、さらに楚系青銅器が姿を消し始める。新たに明器の竈が副葬されるようになる。前期後半では楚系青銅器やその模倣器は完全に姿を消す。中期になると礼器系セットと日用器系セットが混在するようになり、両者の

区別がなくなる。個別の器種では釜が副葬されなくなり、代わりに漢式壺が出土するようになっていく。

#### 江漢地区

戦国時代中期には木槨墓と煮沸器の鼎、供膳器の盒、貯蔵器の壺、盥器の匜・盤といった組み合わせが一般的であった。戦国後期から統一秦時期になると墓形が木槨墓であることに変化はないが、副葬飲食器は煮沸器：釜・釜(陶器・金属器) - 供膳器：盒(漆器)・盃-貯蔵器：小口甕・罐となっている。前漢前期になると鼎・盒・壺・釜といった組み合わせに、倉・竈などの明器が出土するようになる。前漢中期になると漢式壺が副葬されるようになる。

以上が各地区における戦国墓から秦漢墓への変遷である。この検討から、墓葬の変化には、細部を見ると地域差が存在するが、大きな変化の方向は一致していることが分かる。その変化とは以下ようになる。

戦国中期までは墓形は木槨墓であり、副葬飲食器には青銅礼器やその模倣陶器を副葬する墓葬と日用陶器のみを副葬する墓葬が見られた。後期になると秦とその占領地では鼎・盒・壺または釜といった組み合わせが広がっている。墓葬については華北では洞室墓が主流となるが、華中では木槨墓が継続している。前漢前期では各地とも鼎・盒・壺または釜といった組み合わせになるとともに、倉・竈といった器物明器が副葬されるようになる。中期は基本的には前期と同じだが、貯蔵器の漢式壺が一般化している。

(2) 戦国墓から秦漢墓への変化とその背景  
以上の墓葬の変遷の検討をもとに、戦国墓から秦漢墓への変化とその背景についてまとめてみたい。

戦国墓で副葬飲食器の中心となっていた青銅礼器とは、西周時代以来それを所持し儀礼・祭祀を行う者の権威を象徴的に表現する威信材であり、儀礼・祭祀を行う上で必要な煮沸器・供膳器・貯蔵器(酒器)のセットを構成し、墓葬に副葬される場合でもこのセットは維持されてきた。しかし戦国墓から秦墓へ移行する中で煮沸器・供膳器・貯蔵器のセットは維持されるが、個々の器種は青銅礼器とその模倣陶器から日用陶器へと変化してゆく。このことは、死者を埋葬するにあたり、その社会的身分の表現を副葬する青銅礼器に求める必要がなくなった、言い換えれば青銅礼器が持っていた威信材としての意義が消滅した結果と考えることができる。死者に副葬するのは煮沸器・供膳器・貯蔵器の組み合わせの「容器」で十分なのであり、わざわざ特殊な青銅礼器のセットを副葬する必要はなくなったのである。つまり、秦墓には戦国墓のように副葬飲食器で被葬者の身分を表現する機能はないのであり、出土する器

物に連続性があったとしても、両者の社会的な意味づけは全く異なっていると考えられる。副葬飲食器には煮沸器・供膳器・貯蔵器のセットのみが求められたのであり、それは日用器で十分であった。青銅礼器や模倣陶器が副葬されることもあるが、これらの器物は日用器とは異なるという意味で礼器としての性格を維持したとしても、戦国時代までの礼器が持つ威信材としての意味は失われており、「高級な容器」に過ぎなかったのである。

このような変化をもたらしたのは秦による占領と統治であることは明らかである。先に述べたように西周時代以来青銅礼器は社会的な身分を表す威信材としての役割を果たしてきた。その担い手は各国の諸侯であり、それに連なる貴族達であった。しかし秦の占領により、青銅礼器で自らの社会的な地位を表現していた階層は消滅したのであり、同時に威信材としての青銅礼器もその使命を終えたのである。

このように秦墓では礼器系のセットを構成した飲食器が副葬されなくなり、これに代わる飲食器が副葬されるようになるが、その様相は地域により違いが見られる。その一つは西安地区の墓葬と共通性が高い礼器系の飲食器を副葬する地域である。西安地区では煮沸器として鼎、供膳器として盒、貯蔵器として壺・蒜頭壺・鈇・繭型壺といった器種が副葬されている。洛陽地区や襄樊地区などではこれらの器種を副葬した墓葬が一般的となっており、強い繋がりがあったことがわかる。また山西南部地区では日用陶器が副葬されるが、その中には繭型壺が含まれ、さらに洞室墓が一般化するなど、西安地区との強い影響関係が認められる。これに対して江漢地区では西安地区と共通した礼器系の副葬品は少なく、在地的な日用陶器の副葬が一般的である。このように江漢地区では上記の地区とは異なり、西安地区の影響は大きくはない。

つまり秦の占領によりそれまでの統治システムが崩壊し、それに伴い礼器系の飲食器も副葬されなくなった。その代わりとなる飲食器が副葬されるようになるが、そのとき西安地区の飲食器の組み合わせの導入に地域差が存在したのである。山西省南部、洛陽地区、襄樊地区などでは西安地区の飲食器の影響が強いが、江漢地区では在地色の強い飲食器の組み合わせとなったのである。その背景には、秦による統治の違いがあったと考えられる。すなわち西安地区の飲食器の影響が強い地域は秦の強い統治があったと考えられる。これに対して在地色が強い飲食器が副葬される地区は秦の統治が相対的に弱かったと考えられる。

前漢時代の墓葬は基本的には秦墓の様相を引き継いでいる前漢前期の墓葬では鼎・盒・鈇・壺といった組み合わせが一般的になっている。さらに明器として倉と竈が副葬されている。中期は前期から大きな変化はない

が、この時期には新たに各地で漢式壺の副葬が見られるようになってきている。このように秦墓から漢墓への変化は緩慢であるが、その過程で秦墓に見られた地域色が薄らぎ、全体的な斉一性が高まっている。その背景には漢の統治が緩やかにではあるが、確実に浸透したことを表している。

(3) 終わりに～秦から漢への統治のあり方  
本研究の結果、秦から前漢前期にかけての統治について、以下のような実態が明らかになった。

秦の占領地では副葬飲食器の中心となっていた礼器系セットが姿を消す。この変化は、礼器を威信材としていた各国の支配層が、秦の占領により消滅した結果と考えられる。ただし秦墓の副葬飲食器には、秦の中心であった西安地区のものが持ち込まれる地域と、地域色が強い日用器が副葬される地域があり、秦の支配に地域的な強弱があったことが分かる。

前漢前期の墓制は秦のものが継承されるが、上記のような地域色が徐々に解消される方向性が認められる。この変化は漢の支配が緩やかにではあるが、着実に浸透していた結果であると考えられる。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計5件)

小澤正人, 江漢地域における秦墓の成立, 飯島武次編『中華文明の考古学』, 巻なし, 2014, pp. 218-230

小澤正人, 湖北省老河口市における秦漢時代墓葬の変遷とその背景, 吉村作治先生古稀記念論文集編集委員会編『永遠に生きる』, 巻なし, 2013, pp. 73-90

小澤正人 馬王堆1号墓副葬品からみた漢墓の特質, 岡内三眞編『技術と交流の考古学』, 巻なし, 2013, pp. 434-445

小澤正人, 湖北省襄樊市王坡遺跡における墓葬の変遷とその背景, 成城文藝, 査読あり, 225号, 2013, pp. 36-89

小澤正人, 河南省淅川県李官橋盆地における春秋戦国時代墓葬についての一考察, 古代, 査読あり, 125号, 2011, pp. 25-46

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

小澤 正人 (OZAWA, Masahito)

成城大学・文芸学部・教授

研究者番号: 00257205